

因念君天心全集
1

平凡社

岡倉天心全集 (全八卷)

第一卷 定價 五四〇〇円

一九八〇年二月二十九日 初版第一刷発行

著者 岡倉天心

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地
郵便番号一〇二
電話〇三二六五〇四五
振替東京八二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

凡 例

- 一、本全集は、岡倉天心の著書、著述、講演、談話、未発表草稿、日記、ノート、書簡などを、現在可能なかぎり蒐集し、これに関連資料を付して、集大成したものである。
- 二、著書、雑誌、新聞に発表された論稿は、原則として初出を底本とし、自筆原稿あるいは異本との異同を校訂した。
- 三、英文の著書、著述、未発表草稿は、厳密な校訂をほどこした後、すべて新訳して収録した。
- 四、自筆の日記、旅行日誌、古社寺調査ノートなどは、できるだけ原型を損わぬよう翻刻した。
- 五、収録文は底本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便宜をはかるため、次の方針で整理した。
 - 1 原題のない草稿や新聞掲載の講演速記などには、編者による標題を掲げた。
 - 2 漢字は新字体を使用し、俗字・略字は通行の字体に改めた。
 - 3 あきらかな誤字・誤植は訂正し、誤使用あるいは正誤を判断しかねる用語・用法には、その初出に「ママ」を付した。また、現在通行の用法では誤字・誤記に類する用法も、文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかつた。
 - 4 仮名遣い、平仮名・片仮名の別、および濁音表記は底本通りとし、変体仮名(例 ま↓れ)、合字(例 尾↓トモ)などは通行の文字に改めた。

目
次

凡例

東洋の理想

- 序文 7 理想の領域 13 日本の原始美術 18 儒教——中国北部 22 老子教と道教——中国南部 31
 仏教とインド美術 39 飛鳥時代 49 奈良時代 59 平安時代 68 藤原時代 74 鎌倉時代 79 足利時
 代 83 豊臣時代と徳川時代初期 94 徳川時代後期 99 明治時代 104 展望 119 原註 124

東洋の覚醒

- 一 135 二 144 三 149 復活 158 劍 167 時は来た 169

日本の覚醒

- 刊行者の序文 175 第一章 アジアの夜 177 第二章 蛹 184 第三章 仏教と儒教 195 第四章 内からの
 声 201 第五章 白禍 210 第六章 幕閣と大奥 217 第七章 過渡期 227 第八章 復古と革新 234 第九章
 生れ変わり 242 第十章 日本と平和 248 年表 257 原註 259

茶の本

- 第一章 人情の碗 266 第二章 茶の流派 274 第三章 道教と禪道 281 第四章 茶室 290 第五章 藝術

鑑賞 300 第六章 花 307 第七章 茶の宗匠たち 317 原註 321

白狐…………… 323

登場人物 325 梗概 326 第一幕 328 第二幕 345 第三幕 360

ヨシツネ物語…………… 379

どのようにクラマの僧院で育てられたか 381 橋のペンケイ 382 龍虎の書 385 ヨシツネのムツ下向 390 ウシワカ、イセノサブローと会う 392 ヨシツネのムツ到着 394 ヨシツネ、ムツを去る 394 イチノタニの戦闘 400 ヤシマの戦闘 407 トサボの襲撃 413 タイモツの嵐 416 ヨシノにおけるヨシツネ 419 アタカの間で 420 エゾへの下向 423

コアツモリ(若きアツモリ)…………… 427

アタカ…………… 435

訳註…………… 441

解説…………… 453 木下順二……………

解題…………… 475

岡倉天心全集 第一卷

東洋の理想

——日本美術を中心として

佐伯彰一 訳

出版社の序

本書は生粋の日本人が英文で書いたものであることを申し上げておきたい。

目次

序文	7
理想の領域	13
日本の原始美術	18
儒教——中国北部	22
老子教と道教——中国南部	31
仏教とインド美術	39
飛鳥時代——五五〇年～七〇〇年	49
奈良時代——七〇〇年～八〇〇年	59
平安時代——八〇〇年～九〇〇年	68
藤原時代——九〇〇年～一二〇〇年	74
鎌倉時代——一二〇〇年～一四〇〇年	79
足利時代——一四〇〇年～一六〇〇年	83
豊臣時代と徳川時代初期——一六〇〇年～一七〇〇年	94
徳川時代後期——一七〇〇年～一八五〇年	99
明治時代——一八五〇年から現在まで	104
展望	119

序文

日本藝術の理想を論じた本書の著者、岡倉寛三には、将来同じテーマでさらに大冊の、完全な図版入りの本を書いて貰いたい、彼は東洋考古学と美術の現存最高の權威として、以前から自国のみならず他国にも広くその名の知られている人である。

一八八六年、まだ若年の岡倉氏は、欧米の藝術史、また藝術運動の研究を目的とする、日本政府派遣の美術調査団の一員として出かけた。この欧米体験によって圧倒されるどころか、逆にアジア美術に対する彼の鑑賞眼は一層深められ、強化された趣きで、その時以来、東洋の各地で大いに力を得ている擬似ヨーロッパ化の傾向にはつきりと対立して、日本美術の強力な国粹化という方向にむけてその力を傾けてきたのである。

西洋から帰国するや、日本政府は岡倉氏の功勞に酬い、氏の信念を認めて、東京、上野に新設された美術学校校長に任命した。しかし、政治的变化が生じ、いわゆる欧化の新たな波が、この学校にも及んで、一八九七年、ヨーロッパ的な方法を一層顕著にすべしという決定がなされるや、岡倉氏は直ちに辞任してしまった。その六ヶ月後、当時日本のもっとも有力な青年美術家三十九人が氏の周囲に結集して、東京郊外の谷中に「日本美術院」を開設したが、本書の第十四章に、この動きについての言及がみられる。

岡倉氏が、ある意味で日本のウィリアム・モリスといえるなら、日本美術院を日本のマートン・アペイとよぶことも出来るだろう。ここでは、日本の絵画、彫刻のほか、漆工、金工、青銅鑄造、陶工など、各種の裝飾美術が行なわれていく。この院の参加者達は、西洋における現代美術の動きの最上のもので対して深い共感と理解をよせると同時に、日本固

有の靈感を維持し、伸長することを目ざしている。彼らの作品が、世界のどのものにも劣らぬという誇り高い確信をいだいており、メンパーの内には橋本雅邦、観山、大観、雪声、香山、その他の有名な人々がふくまれていた。日本美術院の仕事に加えて、岡倉氏は余暇をさいて、日本美術の名品の分類という政府事業を助け、また中国、インドの古代遺物を現地に訪れて研究した。インドについては、東洋文化に造詣深い旅行者の近代最初の来訪というべく、岡倉氏によるアジャンタ洞窟の視察は、インドの考古学に一時期を画するものであった。同じ時期の中国南部の美術に通暁しているので、現在洞窟内に残っている石像がもともとは彫像の骨格つまり基礎として作られたもので、描写の生氣と動きの一切は、後に彼らをおおい包んだ厚い漆喰の層の中にもりこまれたものであったことを直ちに見ぬいたのである。實際彫刻を細かく調べてみれば、こうした見方に十分根拠のあることが裏づけられるのだが、「金銭すくのヨーロッパの意識せざる文物破壊」が、無智から、悲しむべき「清掃」作業を、また意図せざる破壊を加えてきたことは、ちょうどつい最近英国の地方教会に起ったのと同様であった。

藝術は自由な状態にある国民によってのみ発達せしめられるものだ。それは、我々が民族意識とよんでいる、あの自由の歓喜に至る大いなる手段であると同時に結実でもある。そこで、千年に及ぶ抑圧によって自発性から引き離されてきたインドが、労働の歓喜と美の世界のうちにその座を保ち得なくなったとしても、あまり驚くには当たらない。しかし、有能な権威者の口から、かつては、アッシュカ王時代の宗教と同じく藝術においても、インドが全東洋の先頭に立ち、インドの大学や洞窟を訪ねた無数の中国人巡礼たちにその思想と趣味の刻印をあたえたこと、彼らを通じて中国自体の彫刻、絵画、建築の発達に、また中国を通して日本にも影響を及ぼしたと聞かされることは、大いに心慰さむことである。

しかし、たとえばインド彫刻に及ぼしたギリシアのいわゆる影響なるものについての、岡倉氏の意見の驚くべき価値をよく理解するのは、インドの考古学に特有な問題に深く通じている人々に限られるだろう。世界美術の大きな系統として、ギリシアに対立するもう一つの根源、つまり中国側を代表して、岡倉氏は、ギリシア起源論の不合理さを明らかにすることが出来る。インド美術の発展に實際深くつながっているのは、主として中国であり、この理由は恐らく、共通の初

期アジア藝術の存在のうちに求めらるべきもので、その影響のはるかな波紋のあとは、ギリシアの岸辺に、アイルランドの西端に、またエトルリア、フェニキア、エジプト、インド、中国に及んでいる。どの地域が先かという情けない論争などは、こうした理論のうちにこそ、然るべき結着、和解を見出すべきもので、ギリシアも、その然るべき位置、つまり古代アジアの一地方という所に落ち着くわけで、学者たちが北欧の大サーガのいわゆるアスガードの地と見なしてきたのも古代アジアの一地方に他ならない。同時に、将来の学問にとつての新世界が開けたことになり、より総合的な方法と見方によつて過去の誤りの多くも訂正されるに違いない。

中国についても、岡倉氏の扱ひ方は、同様に示唆に富んでいる。北方思想と南方思想についての氏の分析は、すでに中國人学者の間でもかなりの注目を集め、老子教と道教とを区別する見方は、広く受け入れられている。しかし、彼の仕事は、大局観においてこそその真価を発揮する。というのは、すでに世に広く知られた仏教の中國流入、ヒマラヤの峠をこえ、また海峽、海路をへて流入して行つた歴史的な壯観、おそらくアシヨカ王のもとで始まり、紀元二世紀のナーガールジュナ〔龍樹〕の時代に至つて、中國でもはつきりと表面化したこの運動が、決して孤立した出来事ではなかつたと、岡倉氏は主張する。むしろこれこそ、アジアが生き、かつ繁栄し得る唯一の条件を代表するような出来事だといふ。仏教とよばれているものも、じつは明確に方式化された教義ではなかつた。厳密な境界をもち、異端とはつきり一線を画し、独自の聖庁を生み出し得るような教義宗教では、元来なかつた。これを外國人の意識で受けとる際には、むしろヒンドゥー教というあの広大な綜合物にあたえられた名前と見なすべきものである。というのは、岡倉氏は、九世紀の日本美術という主題を扱う際に、文化交流の中心となつたのは、たんに仏陀の個人的教義ではなく、東洋の神話總体であつたことを十分明らかにしてくれる。モンゴル精神の仏教化ではなく、じつはインド化こそ、現実に生じていた過程であつた——ちやうど、キリスト教が異國の地に受け入れられる際、その最初の宣教師の名前から、フランシスコ教という呼び名を得るように。

よく知られていることだが、日本の場合、その國民的活動の中核的な要素は、つねにその藝術に存する。それぞれの時